



TITLE:

生涯読書量

AUTHOR(S):

苧阪, 良二

CITATION:

苧阪, 良二. 生涯読書量. 静脩 1969, 5(5): 1-2

ISSUE DATE:

1969-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36494>

RIGHT:



生涯読書量

苧 阪 良 二

図書館や学部図書室に出入するのは平均して週2回ぐらいだが、一体何のために出入りしたかを反省すると、文献探索と複写のためであって読書のためではなかった。本来読書館であるべきものが私にとって複写館となってしまった。考えればおそろしいことである。やたらに本を読んだ時代、よく買った時代、そして今やよく写しておく時代となってしまった。

らんどく→つんどく→うつしとく。あと10年余（いや今すぐやめたい気もする）、自分にとってどれだけ文献が読めるというのだ。今まで買った本、写した文献全部読めるのか、疑わしい。

学生部々員にさせられた、ある日、大阪の古書展でマルクスの初版本をみてふと思ったことは、資本論を読んでおかねば学生と議論できないだろうと。家にあるドイツ版3冊をひらいた。ドイツ語が眼にしむのでほん訳のほうをみる。5巻、本文だけで約2,900ページある。これでは一年の年期が終るまでに読み切れない。このことから私は自分の商売を思い起こした。私は眼球運動が専門である。大学生レベルで読書速度は秒速10字とみてよいのである。ただし平均的な日本文で。それでは資本論本文だけで最高読書速度で何時間かかるか。推定2,143,509字と出たので、約60時間で読めるということになる。ただしこれは100メートル10秒の飯島選手にナホトカからアムステルダムまで飲まず食わず休まずに走れというようなもので架空の値に等しい。実際は読みつつ考えたり、表を理解したり、註釈を見たりするのだから亜欧徒歩旅行に要する時間よりはるかに長い。ここまで考えてくると、一体資本論を徹底的に読破した人は何人あるのか、だんだん疑問になってきた。もっとも本は全部よまねばだめだと力むようなやばな考えはないが。全36巻のマルクスの全集、まともに全部読むには何もかもおいて10年はかかるだろう。

人生70年、読書年は15才～70才として55年、1日平均5時間読書できるとすると約10万時間。1日1時間とすると2万時間しか本が読めない。平均的な質と量をもった本が3時間～5時間で1冊読めるとすると、多い人で一生涯に33,458冊、少ない人で2,000冊余という計算になる。これは極めて単純な計算だから、実際には多くの変数をそなえた式をたてて、また多種多様の本を分析して推定しなければならないことはいうまでもない。要するに生涯読書量というものを算定して自分の知的生活の方針をきめるべきで、本はいくらでもよめると思うのは錯覚である。少年老い易く学成りがたしである。

過日有名なる東大構内を見学したら落首が目にとまった。教官腐り易く学ひさぎ易し…。原稿書きは日速、平均5枚（読めば3.3分）というところか。書いていると読めない…これ

からあとは賢明なる学生諸賢に語る必要はない。視聴覚情報は1億ビット/秒以上であるが手はせいぜい20ビット/秒以下であることにわれわれは想到しなければならない。

(教育学部教授)

~~~~~ 一言・ふたこと ~~~~~

大学図書館のもっとも重要な使命が、学生にとっても、また研究者にとっても、読みたい本がいつでもすぐ手に入ることであるのは、いまさら言うまでもない。事実、関係者の非常な努力のお陰で、学内の各部局のどこに、どんな図書があるか、総合目録でひと目でわかり、相互閲覧の制度を利用することも可能ではある。

しかしながら、境界領域であるため、あるいは現代の花形というよりはむしろ未来の分野であるため、あるいはまた、きわめて高価であるがゆえに、学内のどこにも購入されていない雑誌や単行本が少なくないのである。各部局の自主性尊重は自明の理にしても、図書の購入が現在のように全くばらばらに行なわれている限り、上のような落とし穴を埋める術はない。一方附属図

書館においては
少ない人員と予算で、かつ

—全学図書協議会の設立を望む—

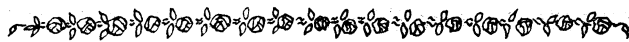
意外な落とし穴を埋めるために

涙ぐましい
ほどのサービス
精神で、活発な
改善を続けてお

られるのであるが、評議会をはじめとする大学の管理機関に対する館長の発言権は無きに等しいときいている。

限られた予算を出来る限り有効に用いるために、全学図書協議会（仮称）を設立し、各部局図書館（筆者の属する理学部には未だないが）から選出された代表者に、附属図書館からの専門委員を加え、各専門分野における第一線の研究者と学生の活動に必須と思われる図書が、学内のどこかに必らず備えられるように、また無意味な重複が避けられるように配慮されることを切に望んでやまない。

(理学部助教授 徳重正信)



われわれ薬学の研究に携わっている者にとって、東端別荘にある学部図書室は小じんまりとしているが何者にも換え難いものである。この活動は学部図書室としての専門分野における独自の機能を十分果している。近年の文献は比較的良く収集されており、ほとんど全ての文献、雑誌、単行本が開架式になっているため、文献、検索、閲覧に非常に便利である。

しかし、なにぶんにも一学部の図書室であるという制限、火災による書物の欠失、かてて加えて昨今の文献の増大、はんらんから不便を感じることも少なくない。巾広い文献の正確かつ迅速なはあく、

供給、専門分野別の
分類、整理、統合さ
らにはこれら膨

—薬学部図書室に望むこと—

今一歩の前進を

大な量にのぼる
図書の保管等に関し
てかなりの試みがな
されてはいるが、今

一歩の前進が望まれる。なおこれらの点については、中央図書館、各学部および研究室の図書室、さらに広く各大学との連係、交換、研究が行なわれることが必要であり、かつ、この意味での再認識を各層に促すことも大切であろう。もっと身近かに、管理、保全のための館員の増員、貸出冊数、開館時間、希望図書購入の扱い方等解決すべき問題は多々ある。学部学生の利用と研究用との間のみぞをどうするかということももっと考慮されてもよいのではないかと思う。最後にさらに薬学の図書室が整備され、発展していくことを期待する。

(薬学部大学院 河谷紘樹)